ミアの ティーパーティー

明日は、ミアの たん生日です。ティーパーティーの 招待状は、もう みんなに 送ってあります。家中が、パーティーの 準備で 犬いそがし でした。お母さんは、アップルダンプリングを 作るため、りんごを スライスし始めました。お父さんは、お母さんが 焼いている 散々の おいしそうな お菓子や デザートを 全部 並べられるように、ダイニング ルームを 準備しています。お兄ちゃんの ルーカスは、罵の ペガサスの 体を 洗って ブラッシングするため、外に 出て行きました。

ミアは、とてもわくわくしています! 家の 前に ある いちご畑の いちごを つむために、かごを 2つ 持って、外に かけ出して 行きました。 そこへ 冷たい 園が ふいてきましたが、ミアは いちごを つむのに 夢中で、気にも 留めませんでした。いちごを つみながら、ミアは 間白の バーティーの ことを 観像して、ニコッと しました。 「間白は、そでに リボンが 付いた かわいい ドレスを 着るのよ。 <る <る 回ると すそが 広がる やつ。お母さんは、アップルダンプリングと いちご タルトと ペカンパイを 作ってくれるし。 飲み物は アップルサイダーね。

すべてが 順調に 進んでいるようでした。 かごが いっぱいに なると、ミアは 家の 中に かけこみました。

とっても すてきな パーティーに なるわ!」

「まぁまぁ。ゴールデン・サン・バレーの みんなに あげられる<らい、 たくさん つんだのね。」 そう 言って、お母さんは 赤く そまった ミアの ほおに ふれました。「外は 蒙いわ。 どうして コートを 着なかったの?」

「そんなに 長い間 外に 出てなかったもの。」 そう 言って、ミアは やえた うでを さすって 温めました。



その夜、夕食の 席で・・・

「かぜなんか ひいてる 場合じゃ ないわ! 朝日は 元気で いなくちゃ いけないんだもの!」 そう 言うと、ミアは また くしゃみを しました。「だいじょうぶよ、本当に。」 けれども ミアの 首は しょぼしょぼし、ほおも 赤く なっています。

「おまえに 今 必要なのは、ベッドの ようだね。 朝日の 朝、 どんな 真合か 見てみると しよう。」と、お父さんが 言いました。

ミアは 〈た〈たに つかれ切って、言葉も 遊せません。おくさんは ミアを だき上げて、 部屋に 連れて行きました。 ベッドに ねかせると、いっしょに 祈って〈れました。ミアは、 ティーバーティーの ことを 考え、前首の 朝までには 元気に ならないと、と 懲いながら 触りに つきました。

*** * ***

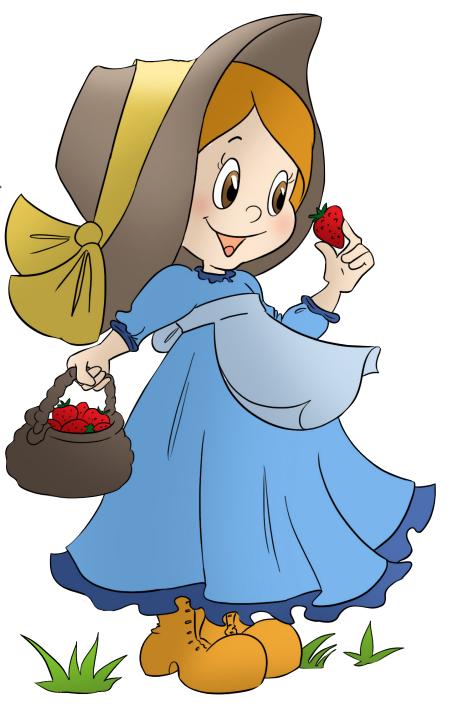
整額は 昨日よりは マシでしたが、すっかり 良くなった わけでは ありませんでした。 それで、ミアが 元気に なるまで、ティーパーティーは 延難に なりました。

お兄ちゃんの ルーカスが、ミアを なぐさめようと して、部屋に入って来ました。

またらゃんの ルーガスが、ミアを なぐさのようと して、部屋に 入って来ました。
ミアは かとんの 中に 深く もぐりこんで 言いました。「お母さんが、わたしは かぜを
ひいたから、治るまで 休んでなくちゃって。 友達を ティーパーティーに 呼べなく なっちゃったわ!」
「残念だったね。ティーパーティーは お預けに なっちゃったけど、今日 できる ことも あると
思うよ。お話を してあげようか? ミアは、お話が 大好きだろ?」と、ルーカスが 言いました。

「何のお話?」 だれず、ミアはだしかったことをだれて聞き返しました。

「1階の 本だなの 上に ある ヒカヒカの トロフィーの こと、知ってるだろ?」



ルーカスが ほほえんで 言いました。 「最初は、ペガサスを 競馬に 出すなんて、空然 考えて なかったって、知ってたかい?」 「知らなかったわ!」 ミアは 声を 上げました。

「実を言うと、ぼくは、管てていた かぼちゃが 今までで 一番 大きく おいしそうに できたんで、それを かぼちゃコンテストに 出す つもりだったんだ。だけど、お祭りの 1 週間前に、ヤギの アルテミスが 囲いから 逃げ出してね。それが、ぼくの かぼちゃの最後さ。」

「きっと 誰しかったでしょうね!」 ミアは、ルーカスの やるせない 気持ちが よく 分かりました。

ルーカスの 話は 続きます。 「ああ、本当に 悲しくて、がっかりしたよ。ぼくの カンペキな かぼちゃが アルテミスのお腹の 中に 入っちゃった せいで、お祭りに 出すものが 何も なかったからね。」

「それで、どうしたの?」と、ミア。

「ぼくは カンカンだった。 家にも $^{\circ}$ らず、 $^{\circ}$ 日中 いじけてたんだ。 結局 夕食の 時間に なって $^{\circ}$ なると、お交さんが 来て となりに $^{\circ}$ 空った。 かほちゃが $^{\circ}$ でられて しまったのは $^{\circ}$ の毒だけど、いつまで そんなに いじけている つもりなんだい、って $^{\circ}$ 動かれたよ。 お交さんは ぼくと いっしょに $^{\circ}$ でってくれて、お祭りで 楽しみに している 数々の ことを $^{\circ}$ 考えてごらんよって $^{\circ}$ 言ってくれた。 そうしたら、 $^{\circ}$ が 晴れてきてね。 かほちゃが なくなった ことは、まだ $^{\circ}$ し 腹立たしかったけど、 他の ことを $^{\circ}$ 考えるのは、 $^{\circ}$ 能しい 気持ちを $^{\circ}$ にれる 動けに なった。 その後、 ぼくが お祭りで 競える ことが 他に ないかなって、いっしょに $^{\circ}$ 考えたんだ。 それで、 ペガサスと 競馬に 出ることに なったという わけさ。」

「それで、優勝したのね!」

「そういう ことなんだ。だから 今は、アルテミスが かぼちゃを 食べてしまった ことは 食かったと だってる。 そうで なければ、ベガサスと 草競馬に 出るなんて こと、絶対に なかっただろうからね。」 それ以来、ルーカスと ペガサスは 数々の 小さな イベントに 出て、その 全てで 好成績を 出して いるのです。

「私も、ティーパーティーの ことが そんなに 気に ならなければ 良かったのに。 病気で いるのは いい 気分じゃ ないし、ベッドに いなくちゃ いけないのも いやだもの。」 ルーカスの 話が、ミアの ティーパーティーに 起こった ことと 深い 関係が ある ことに 気付いて、ミアが 言いました。「私、どうしたら いいのかしら?」

「祈ったら いいね。あの日 ぼくが 落ち込んでた いました。」 これである いいね。あの日 ぼくが 落ち込んでた いました。」 これである いいね。あの日 ぼくが 落ち込んでた いました。「イエス様、いつも 物事が うまく 行くように して下さる ことを 感謝します。 最初は 食くない ことが 起こっても、あなたは 結晶は 全てが 良くなるように して下さいます。 どうか、たとえ 具合が悪くても、ミアが がっかり しませんように。 今日は ミアの たん生日なので、ミアにとって 楽しい ことが できますますように。」



「それから、今日じゃ なくても、他の日にパーティーができること、その時にすてきなドレスが着れることを感謝します。アーメン。」 ミアも、祈りのしめくくりを祈りました。ミアはもうとっくに、ずいぶんと気分が食くなっていました。ルーカスが話し相手になってくれたのですから、ねていなければならないことさえ、食いことのように態えました。そこへ、お父さんがチェッカーの疑をわきにかかえて入って来ました。ミアのほほえみと、ベッドわきのいすに座っているルーカスを見ると、お父さんは、何かいいことがあったんだなとすぐに気付いて、子供達を誇りに贈いました。

「さてと。ミアは ベッドに いなくちゃ いけないが、だからと 言って、たん生祝いを やめるべきじゃ ないしな!」と、お父さんが 言いました。

結局 その日は、楽しく 笑いに 満ちた 日に なりました。お父さんと チェッカーを した 養、ミアは ルーカスとも チェッカーを しました。お留さんは みんなの ために、温かい ハーブティーと、切り分けた 果物を 持ってきて くれました。その後、お父さんが 自分の 少年時代の 話を してくれました。お留さんは ベッドに 産って、ミアと いっしょに 歌を歌ってくれました。

1週間後の 晴れた 日の 宣下がり、待ちに 待った ティーバーティーが 始まりました。 ミアは、リボンの 付いた かわいい ドレスを 着ています。 お母さんは お客さん達に アップルサイダーを 出し、ルーカスは、ミアと ミアの 友達を 馬の ペガサスに 乗せて あげています。

「自分の たん生日に 真合が 麗く なったなんて、がっかりだったでしょうね?」 ペカンパイを よそって もらうのを いっしょに 並んで 待っていた サラが、ミアに たずねました。

「ええ、最初は がっかりだったわ。だけど、その後、がっかりする 理由は ないって



かかったの。」 ミアは 歩し 大人に なったような 気分でした。 「ティーバーティーは できなかったけど、特別な 1日だったのよ。それに、 今日もまた、今度は みんなに、たん生日を 祝って もらえてるんですもの!」

終わり